

# 元田永孚の思想形成と展開

巖 錫仁（倫理文化研究センター研究フェロー）

## はじめに

題目で示した「思想形成」の「思想」は、漢学、とくには儒学（朱子学）を指している。本稿は、同郷熊本藩の後輩の徳富蘇峰（1863-1957）が、「先生の最も振うたるは後半期である。若し前半期のみならば、先生の唯一の道学先生として、僅かに儒林伝の一頁を充たしたに過ぎまい。但だ後半期あるがために、茲に特筆すべき一個の元田先生は聳え出でたのである」というところの、元田永孚（1818-1891）の後半期の業績を生み出す、その基盤となる彼の儒学思想の形成に焦点を合わせて、その内容をもう一度考察しようとするものである。

徳富が「特筆すべき」ものとして称えている元田の後半期の業績は、海後宗臣の言葉を借りれば、「側近に奉仕して御進講に当ると共に、国民教育全般の大本に関する思想を確立し、国民教育に帰趨するところを明示した業績をもって、明治教育史上に全く独自の地位を占めたのである。日本教育史上に数ある先哲のなかに於いて元田永孚の如き教育主本確立についての業績を残した教育家は他に類例を見ることが出来ない」、というものになろう。五十四歳にして明治天皇の侍読となり、以後二十余年間側近として『幼学綱要』の編纂や「教育勅語」の草案起草などをはじめとして明治教育史の最も影響力のある存在であったということであるが、海後のこの評価が、元田の前半期に形成された儒学思想と彼の後半期の教育史上の業績とを不可分の関係において捉えていることは、いうまでもない。

こうした元田への肯定的な評価、あるいは彼の儒教思想と教育史上の業績を連続的に把握する立場に対して、反対する立場ももちろんある。いわゆる元田の儒学思想と教育政策を「保守反動」のものとして捉える視角である。久木幸男は、元田の儒学思想と教育史上の業績との関係について、「確かに彼は、明治期の儒学者として最も著名な一人であった。……しかしその知名度は、侍補・侍講という当時の儒学者として最高の政治的・社会的地位を永年にわたって占めつづけたこと、その地位を利用して『教育主本の確立についての業績を残した』ことに由来しており、その儒学思想の卓越性や儒学者としての業績によるものではない。彼の思想を体系的に展開した著書は一冊もないし、経学に対する理解の程度を示す著作も、その生前には公にされなかった。儒学者としては見るべき業績を全く残していない」と、否定的な見解を露わにしている。そのうえで久木は、「教育大旨」の提示や『幼学綱要』の編纂など、元田が学校教育に儒教道徳を導入しようとした実行例を検討し、「その儒教を元田流に再編ないし改編することには失敗した」といって、元田の儒学思想と教育史上の業績との連結を断ち切っている。ここでの「元田流に改編した儒学」とは、「天皇崇拜」を中心に取入れた、いわゆる国体論的な儒学をいう。

これとはすこし方向を異にして、朱子学に思想的基盤をもつ学者が明治の教育政策を担当したことが問題であった、という立場もある。たとえば、山住正巳は、江戸儒学には「寛容主義」に基づく伊藤仁斎や荻生徂徠のような儒者も存在したが、「こういう先達の考えは、十九世紀後半、

明治十年代初頭に『教育の体系』確立をめざす為政者の目には入らなかった。というより、それに目を向けなかったのである。教育勅語を作成し発布した人たちの考えは、仁斎や徂徠ら徳川期のすぐれた儒学者たちのそれと正反対のものであり、これは日本の教育にとって不幸なことであった」と述べる。日本の教育を不幸にさせた主体は、仁斎や徂徠的な寛容主義の儒学の反対側に立ち、「人心を規範でしぼる」という厳格主義の朱子学者であったというものである。山住は、朱子学者たる元田の思想的基盤そのものを問題視しているのである。

以上と関連して、「教育勅語」に関する和辻哲郎の立場も引いてみよう。和辻は、「もし教育勅語を以て明治時代の倫理思想を代表させ得るとすれば、その特徴は古今東西に妥当すべき道を説くといふ点であって、天皇尊崇とか忠孝とかを力説することではない」という。具体的には、勅語の起草者が忠孝を国体の精華とする思想を揚げたのは、水戸学の残存勢力に推されたことによるもので、全体の内容を封建的な忠君思想を強調しているかのように解釈するのは「誤解」であり、「もしこの誤解を除いて教育勅語の本論を考察するならば、そこに羅列された徳目が、ほぼ人間存在の諸段階を包括していることに気づかざるを得ないであろう」とも論じている。儒教思想の人倫という普遍性に焦点を合わせて、名前こそ見えないが、勅語の起草者として忠実な儒学者たる元田の立場を擁護しているかのようにも捉えられる言説である。

以上、元田の儒学思想とその教育史上の業績をめぐって錯綜した見解があることをいくつか引いてみたが、それは幕末・明治期の西欧化の流れにおいてそれに逆らう「保守反動」として、その中心部を担った元田の活動（国体論を装備した儒学復活）が、それ以後の教育分野のみならず、日本の近代史に与えた直・間接の影響の大きさを物語るものであろう。いずれにせよ、元田の儒学思想の性格講究が欠かせないこととなるが、本稿ではそのために、彼の儒学思想の形成過程を、江戸思想史、さらには東アジアの思想史的な脈絡に置いてその遠近関係を考察する。具体的には、「実学」とその基盤となるいわゆる「心学」を中心として、元田に登場する江戸の儒学者——熊沢蕃山（1619-1691）、荻生徂徠（1666-1728）、林羅山（1583-1657）、伊藤仁斎（1627-1705）、山崎闇斎（1618-1682）——に対する評価を考察し、実学派の淵源となる朝鮮の李退溪（1501-1570）と自藩の先輩の大塚退野（1678-1750）を通して形成される元田の儒学思想の特徴を明らかにしたい。